



文官養老金之儀ニ付テ建言

2733



114
A 4506



文官養老金ノ儀ニ付キ建言

文官養老金ノ事ハ現今何等政體ノ政府ノ形情ニ就テ考フルモ國家ヲ維持スルノ義舉ニシテ最モ緊要欠ク可カラサルモノトス然ルニ往日ニ在リテハ政洲一般ニ其ノ緊要事タルノ理由ヲ悟知セサルヨリ該法設立ノ議數々起リシト雖氏竟ニ容ヨラレズコレヲ止ミタリ一千八百六十四年ニ於テ得テ利ノ上院議官ニチチエリニナル人ハ文官ヲ以テ平凡ノ職工輩ト同一視シ

大正十一年四月
隈侯爵寄贈

テ曰ク職工輩ニシテ其ノ被傭期限已ニ満キ後
チ翌續キ傭ハル、ナキニ於テハ已ニ期限内
給金ヲ領受セシ勞役ニ向ヒ再ヒ報勞金ヲ請求
スベキ権理ナシ文官タリトテ何ッ之レト事ヲ
異ニスル理アラザト

又曰ク文官ニセヨ平民ニセヨ其ノ老後ヲ保養
センカ為メニ相應ノ貯蓄ヲナスハ其者ノ各自
天然ノ義務ナリ而メ各自ノ老後ヲ保養シ若シ
クハ死後ニ至リ家族ノ生活ヲ安全ナランメン
ニハ生命請合會社ノ在ルアリ何ッ之レヲ養老

金ニ需ムルヲ為サン乎ト

然リト虽モ今日至リテハ世論大ニ昔日ト其ノ
主義ヲ異ニシ夫ノ反説ノ非ナルヲ知サテ之レ
ヲ實際ニ施行スルニ至リシハ此ニ賛セザル
モ既ニ明カナリ到底昔日ニ於テ流行セシ反説
ノ如キハ机上管見ノ理論ニ止マリ実行スベキ
ノ明策ニアラサルナリ
今日何レノ國ヲ問ハス少給官吏ノ活計ヲ窺フ
ニ僅々ノ給額ヲ以テ中々物價益々騰貴ノ今日
ヲ活過スルニ足ラス或ハ漸クニシテ其衣食ニ

充ツルニ足ルアルモ決シテ其ノ老後ヲ保養シ
若シクハ死後其ノ遺族ノ生育ニ充ツル為メ貯
蓄ヲ為スニ足ラサルハ寔ニ明亮ナリ
然レニ何レノ政府ヲ問ハスモ其歳出ニ増
額ヲ加フルトナク文官ノ老後ヲシテ安全ニ保
養スルヲ得又死後其ノ遺族ヲ養育スルヲ得
ルナリ

斯ノ如クセンニハ他ナシ唯ク政府カ所謂文官
養老金ノ制ヲ設クルニアリ因テ余ハ之レカ方
法ヲ左ニ畧陳セン

若シ夫レ文官ニシテ若于ノ年期中方正端直ニ
シテ其ノ職務ヲ勉勵スル中ハ老後致仕スルニ
至リテモ從前奉職中ニ請ケシ俸給大小ノ比例
ニ照ラシ又ハ奉職年限ノ長短ニ由リ多少ノ養
老金ヲ受クルノ権アルトヲ知ラハ斯レ文官ノ
輩ハ奉職中其ノ職ニ一層勉勵スルハ此ノ制ナ
キノ時ニ際シ何時免職セラレハヤト戰々競々
心ヲ安ゼザル日ノ比ニアラサルハ勿論ナルベ
シ
試ニ思ハ養老金ノ制法未タ五タサルノ日ニ在

リテハ官吏タル者大小ノ職ニ就キ夫々ニ俸給
ヲ受クルト虽此ノ俸給ノ如キハ終ニ其ノ当
時ヲ活過スルニ過キザレハ已ムヲ得ス自カ
ラ將來老後ノ計ヲ為サンカ為メ其奉職中過半
ノ時間ヲ竊ミ官吏ニシテ為ス可カラザルノ事
業ニ後事シ之レカ為メ竟ニ世上ニ其ノ非行ヲ
鳴ラサルノ過源ヲ造ルニ至ルハ古來經驗斷
ナカラス豈養老金ノ制ナキ國ノ官吏ノ為メニ
悲マサル可ケンヤ
今此ノ被害ヲ未萌ニ防クハ甚々難キニアラス

則チ官吏月給ノ中若干部分ヲ月々ニ引除キ以
テ之レヲ一塊ノ元金トナシ之レヨリ養老金ヲ
拂出スノ法ヲ設クルニ在ルノミ
今日歐洲諸國ニ於テハ官吏ノ種類ヲ分ツテ二
トス甲ハ定任ノ官吏ニシテ之レヲ本官ト云ヒ
乙ハ假任ノ官吏ニシテ之レヲ傭士ト云フ然リ
而メ養老金ヲ受クルノ権理ヲ有スルハ獨リ甲
則チ本官ニ限レリトス又一旦此ノ本官ノ地位
ヲ占ムル者ハ重罪ヲ犯セルニ非サルヨリハ決
シテ其職ヲ免セラレ、一ナク而メ通常二十年

間奉職ノ後ニ至リ初メテ養老金ノ権理ヲ享ク
ルモノトス
政府ハ事務ノ都合ニヨリ従来ノ支高ヲ廢スル
トアルベシ假令ヒ之レヲ廢スルノ場合ト虽モ
該局ニ従事セシ本官官吏ノ職務ヲ解ク一能ハ
ス而モ再ヒ之レヲシテ従事セシムヘキ場所ア
ルマテ非役中ハ少ラク之レニ本俸ノ半ヲ付給
シ又再ヒ職ニ就カシムルノ目的ナキニ於テハ
奉職年限ノ長短ヲ論セス之レニ養老金ヲ給与
ス可シ

此ノ養老金ハ素ヨリ従前奉職中ノ官等ト月給
ニヨリ大小ノ差アルベシト虽モ亦時トシテハ
従前奉職中ノ勤功ニ由リ従前奉職中ノ官等ト
月給ニ拘ハラズ時命ヲ以テ若干ノ増額ヲナス
トアル可シ
奉職時間ノ長短、年齢ノ長幼ノ如キモ亦酌量ス
ルトアル可シ
養老金ヲ仕持フベキ元金ハ已ニ前述セシ如ク
政府ノ庫内ニ保守スルヲ通常一般トナスト虽
モ二三ノ國ニ於テハ官吏ノ協同ニヨリ私ニ一

社ヲ起シテ之レカ保守ノ方法ヲ設定シ以テ養
老金ノ仕掛ヲ行フアリ
之レカ元金ニ充テシカ為メニ積置ク所ノ金額
ハ月給ノ多少ニ由リテ差アルハ勿論ナリ則チ
平均月給額ノ百分ノ五ヲ以テスルハ最モ其ノ
當ヲ得タルモノトス可シ

本人死去ノ後チ養老金ヲ受クルノ権理ハ其ノ
寡婦又ハ兒子(成年以下ナルハ十八歳乃至二十
三歳マデノ間但シ其ノ国ニ由リテ異ナリ)ニ譲
リ及ホスヘシ然レモ其寡婦ハ本妻タラザルベ

カラス又其ノ寡婦再嫁スルコトアラバ前夫ノ養
老金ヲ受ケ繼クノ権理全ク消滅スルモノトス
又父ノ養老金ノ権理ヲ譲リ受クルノ兒ハ正婦
ノ出ナラサルヲ得ス但シ男セラ向ハサルハ勿

論ナリ

今日政洲ニ於テハ其奉職セント欲スル官省ノ
事務ニ関スル諸學課ヲ十分ニ學習卒業ノ上數
回ノ試験ヲ受ケ然レ後チニアラサレハ官吏ト
ナレトヲ得ス因テ仕官ノ望ミアル者ハ本官ト
ナリテ定俸ヲ受クルニ至ルマデハ莫大ノ資本

ヲ費サバブルヲ得サルナリ
又水官トナリタル以上ハ嚴ニ商業等ニ從事ス
ルヲ禁セリ故ニ貯蓄ノ資金ナキモノハ獨リ
其ノ政府ヨリ領取スル所ノ俸給ニノ三頼テ衣
食スルヲ要ス
養老金ノ制始メテ立ツヤ帝ニ官吏ノ品格ヲ高
尚ニシ民庶ノ為メニ信重セラレ、ニ至ルノミ
ナラ又此ノ制ナキノ前日ニ比スレハ事務ノ涉
取一層速カニシテ經濟上ノ羨果ヲ結ビシハ曾
テ實際經驗、示ス所ナリキ

又事務ノ涉取速カナル中ハ大ニ官吏ノ員數ヲ
減スルヲ得ベケレハ前日拾人ヲ要セシノ業
モ此法制定ノ後チニ於テハ五人ニシテ足ラン
ハ亦經驗ニ照ラシテ保証スル所ナリ
聖リ而メ各開明ノ政府カ養老金ノ法ヲ設定セ
シ以來其ノ効驗、最大著明ナル者ハ巨万ノ人
衆ヲシテ流浪ノ難苦ヲ免カレシメ且ツ政府ノ
仁徳ノ厚キヲ普ク世人ニ示セシニ在ルナリ
余ハ尤ニ方今專ラ日耳曼國ニ於テ實際上ニ行
テハル、所、養老金規則ノ要ヲ撮抄シ以テ高

職ニ供ス可シ

文官ハ奉職ノ日ヨリ十五ヶ年ヲ経テ始メテ養
老金ノ権理ヲ得但シ本官ニ拜セラレハノ際恰
モ入社金ノ姿ニテ其年報十二分ノ一ヲ養老資
金中ニ納メサルベカラズ
又其後ハ俸給ノ多少ニ因リ月々百分ノ一乃至
百分ノ五ヲ納メザルベカラズ

養老金給與ノ割合

十五ヶ年以上二十ヶ年勤績キノ者ハ	俸給 四分ノ一
二十ヶ年以上三十ヶ年勤績キノ者ハ	全 八分ノ三
三十ヶ年以上四十ヶ年勤績キノ者ハ	全 二分ノ一
四十ヶ年以上五十ヶ年勤績キノ者ハ	全 八分ノ五

但シ五十ヶ年以上勤績キノ者ハ其ノ生涯
奉職中ノ俸給四分ノ三ヲ給スルコトアルベ

シ
右ニ養老金ヲ受クルノ権理ヲ有スルノ官吏時

ニ貧寒ニシテ家計五ヶ難キニ於テハ場合ニ由
 リ更ニ奉職中ノ俸給ハ公ノ一ヲ定規ノ養老金
 ニ加ヘ給スルコトアルベシ
 遺族即チ寡婦ノ為メニ養育料ヲ得ント欲スル
 中ハ結婚ノ日ヨリ以後本員ノ養老金ノ為メニ
 スル積金ノ外ニ尚ホ若干ヲ納メサルベカラ
 ズ
 右ハ則チ日耳曼國ノ規則ナリ而メ愚案ヲ以テ
 スルニ日本國ニテハ右積金ノ割合ハ就中少給
 官吏ノ為メニハ甚々多キニ過キ頗ル堪ヘサル

所アル可シ

然リト云凡左ノ割合ナレバサノミ不都合ハ在
 ラサル可シ

- 第一 本官官吏ニシテ自己ノ養老金権理ヲ
 得ント欲スルモノハ其俸給百分ノ五
 ヲ養老金元金ニ納ム可シ
- 第二 死後妻子ノ為メニ養育料ヲ得ント欲
 スルモノハ外ニ百分ノ二半ヲ加ヘ納
 ム可シ

第三 十五ヶ年勤續ノ者ニ

給スル養老金ノ割合	奉職中俸給	四分一
二十ヶ年以上三十ヶ	全	八分三
年勤續キノ者		
三十ヶ年以上四十ヶ	全	二分一
年勤續キノ者		
四十ヶ年以上五十ヶ	全	八分五
年勤續キノ者		
但シ寡婦ハ本支奉職中ノ俸給六分一ノ養		
育料ヲ受ク可シ(再嫁スルハ給セス)		
又成年以下ノ子貳人以上アルハ其成年マ		

デ尚ホ其ノ十分一ヲ加ヘ給ス
 例ハ奉職中ニ受ケシ所ノ年報六百円ナレバ
 三十年以上奉職ノ上致仕スルニ於テハ年々三
 百円ノ養老金ヲ受クベシ又本支ノ死後其寡婦
 ハ仮令ヒ三人以上ノ子アルモ各^既成年以上ニ達
 セルニ於テハ年々壹百円ノ養育料ヲ受ク可
 シ
 諸テ今マ日本國ニ於テ該法ヲ設立シテ本官官
 吏ヨリ養老金元金中ニ納ムル所ノ金額ヲ概計
 センニ該官吏ノ數總テ壹万八千八百九十三人

其一ヶ年ノ俸給五百五十壹万貳千九百五十六
円以上(即チ一ヶ月凡ソ四拾五万九千四百拾三
円)十九ニ由リ此ノ総額百八ノ五ヲ以テスル片
ハ第一年ノ収入額貳拾七万五千六百四拾五円
ナルベシ然レ片ハ十五ヶ年目ニハ其利息ヲ加
算セサルモ三百拾三万四千六百七拾五円ノ元
金ヲ得又之レニ利息ヲ加フル片ハ三百五拾万
円以上ニ達スベシ然リ而メ十五ヶ年ノ後第一
年目ヨリ毎歳仕掛フ所ノ養老金ノ額ヲ暫ク五
拾万円ト仮定スルニ於テハ貳百万円ノ残額ハ

次ニテ動クナカルベシ但シ十五年ノ後ニ至
リ尙人致仕スレハ又必ス之レニ代リテ欠
ヲ補ハサルヲ得ス而シテ新任ノ本官官吏モ亦
元金中ニ其ノ俸給百八ノ五ヲ納ムベケレバ新
陳交代元金ノ額ニ差ヲ生スルコトアラザルナ
リ
余ハ右ノ計算中ニ遺族養育ノ為メニ納ムル百
八ノ二半ノ統計ヲ加ヘス蓋シ此ノ統計ノ如キ
ハ之レヲ預メ算定スルコト能ハスト虽モ必ス遺
族養育料ニ給スルニハ餘リアラント考定スル

ナリ

又日本國ニ於テハ實際養老金ノ法制定アルノ
日ニ際リテハ既ニ今日マデ十年以上勤續キノ
官吏ノ如キハ且シク之レニ酌量ヲ加ヘ此ノ法
制定前ノ十年ノ為メニハ其十人ノ一若シクハ
五分ノ一ヲ以テ制定後ノ年限中ニ加フ可シ
本官ニアラサル官吏並ニ巡查ヲ合セ九ノ貳万
七千三百七十六人ノ為メニモ亦相当ノ養老金
規則ヲ制定スルモ敢テ不訂ナルコトナカルベ
シ

余カ前文ニ於テ陳述シ来リシ所ノ養老金規則
概略ハ素ト文官ノ為メニ必ス設五セサルバカ
ラサル至緊至要ノ事ナリト虽モ説ノ百出ス
ルハ預メ期スル所ナレハ之レヲ駁撃論伏シテ
此ノ法ヲ實際ニ設立スルコトヲ得ルマデニハ幾
多ノ困難ヲ經サルベカラサルハ余ノ熟知スル
所ナリ若シ此ノ緊要ナル法制ニモテ實際ニ行
ハル、ノ日ニ際リテハ余カ此ノ草案ノ如キ
ハ素ヨリ唯テ該規則ノ先導者トモ稱スベキ一
ノ雛形タルニ過キサルナリ

故ニ余カ草案中緊要部分サハ変更ナキハ其
ノ技業ニ至リテハ何程変更アルモ敢テ害ナカ
ルベシ何トカレハ余ハ日本政府ノ情態ニ付テ
ハ勿論官吏ノ象論ヲモ知ラサレハ余ノ見ノ自
カラ日本ノ情態ト齟齬アルモ亦計リ難クレバ
ナリ

余ハ此書ノ旨ヲ此ニ結フニ當リ一言セントス
若シ此ノ養老金法ニシテ實際施行ノ日ニ至ラ
ハ帝ニ日本官吏及ヒ其ノ遺族ノ幸福ナルノミ
ナラス政府ニ取リテモ亦其益鮮少ナラサルベ

シ何トナレハ政府ハ該法ヲ設クルモ別ニ毫
モ其ノ歳出ヲ増加スルコトナクシテ其ノ官吏ノ
老後及ヒ死後其ノ遺族ノ育養ヲ安全ナラシム
ルコトヲ得レハナリ況ンヤ官吏ノ品行ハ固ノ閑
明ニ関スルハ大本ニ於テオヤ

一千八百七十九年三月六日

ハシリト、フクシ、シ、ホルト

大隈大藏卿閣下



